

ティーチング・ポートフォリオ

大学名 人間総合科学大学

所 属 保健医療学部看護学科

名 前 関川 久美子

作成日 2023年9月27日

1. 責務（何を行っているか、何を果たしているか）

学科における教育活動を年間を通じて円滑に実施している。私の専門は在宅看護領域で領域長を担当している。専門知識・技術・態度が身につく、看護師国家試験に合格できるよう講義・演習・実習に取り組んでいる。

- ・授業科目：職業とキャリア形成（1年必修）、大学生入門（1年必修）、在宅看護学概論（2年必修）在宅看護援助論Ⅰ（2年必修）、在宅看護援助論Ⅱ（2年必修）、看護研究Ⅱ（4年必修）、看護総合演習Ⅰ（4年必修）
- ・実習：基礎看護学実習（1年必修）、在宅看護学実習（3年必修）、統合実習（4年必修）
- ・教育活動：2021年度より度学科内広報委員（委員長）、2021年度より学年担任（主担任）、2022年度より学科内学生委員、2021年度より学科内教務委員、2021年度学習支援WG・国家試験対策委員、2022年度カリキュラム検討委員（副委員長）、2022年度実習室WG（副担当）、2023年度より学科内看護研究Ⅱ担当者会委員

2. 理念（教育に対する考え方）

私が最も大切にしている教育の理念は「人としての生きる力を身に付け、専門職として社会に貢献できる人材の育成」である。主に担当している在宅看護学の科目や看護研究等を教授することで、「論理的な思考力」「主体性」「コミュニケーション能力」「チームワーク力」「リーダーシップ力」「問題解決能力」「他者への思いやり」「看護実践能力」といった力を身に付け、人間を総合的に理解できることを重視している。これらの能力は、人として専門職として、そして保健・医療・福祉・介護・教育などの分野において活躍・貢献するうえで必要となる能力であると考えているからである。これらの能力を大学生活において身に付けて、社会に貢献し、看護を必要としている人の役に立つことに喜びとやりがいを感じられるような人材に成長してほしい。さらに、超高齢化社会を迎え、在宅看護の必要性が高まっている。在宅看護は、他の専門職と連携・協働しながら生活を支援し、伴走者として対象者を理解し寄り添うことが大切であると考えている。将来在宅看護で活躍できる人材の成長を視野に入れて育んでいきたい。

3. 方法（教育方法において大切にしていること）

○授業のアクティブ・ラーニング化を目指す。

授業を組み立てる際に、教員や学生の「問い」を大切にして、授業のデザインを考えている。また、一方な授業ではなく双方型授業を目指している。

①「在宅看護学概論」・「在宅看護援助論Ⅰ」・「在宅看護援助論Ⅱ」では、演習やグループワーク、ロールプレイ、在宅看護技術練習を多く取り入れることで、主体的な学修につながり、論理的思考をすることで科目の理解が促進するようにしている。今年度は、アクティブ・ラーニングの一環として、ジグソー法を取り入れた。また、今の学生は、生活体験が希薄のためイメージしにくい科目であるため、DVDなどの視聴教材やスライドなどを使用しながら、イメージ化でき、興味を持ってもらえるよう努めている。演習中は、机間巡視をして、理解が不十分な学生のフォローを行うよう努めるとともに、理解力

の向上を図っている。授業の展開は、前回授業の復習を行い、授業終了前に小テスト（国家試験問題）を実施している。また、授業資料は、重要なキーワードなどを空白にし、授業中にスライドでそのキーワードを入れた資料を提示し、資料に書き込んでもらうようにしている。

②「職業とキャリア形成」は、1年前期であり入学してすぐに始まる科目である。自分が目指す職業がどのようなものなのか、将来のキャリアも視野にいれながら、どう大学生活を送るのかを演習や他科学生とのディスカッションを取り入れて、「なりたい看護師像」を発見する支援を行っている。

③「大学生入門」は、1年通年であり、担当として関わる回数は少ないが、本格的なグループワークを行い発表会につなげる科目でもある。学生同士のディスカッションが活発になるよう工夫をし、コミュニケーション能力やチームワーク力の向上を図っている。

④「看護研究Ⅱ」は、取り組むテーマを自ら設定させることで、自主的に課題を発見し解決する能力の育成を図っている。

⑤「看護総合演習Ⅰ」は、国家試験対策として、在宅看護学領域の学修方法を教授した。単に暗記ではなく、理解できるよう丁寧に説明をしている。

⑥各実習では、実習等配置の工夫や実習施設との打ち合わせなど密な連携を図ることで、実習環境を整え学生がスムーズに取り組めるよう関わっている。コミュニケーション能力、チームワーク力、リーダーシップ力、問題解決能力、他者への思いやり、看護実践能力を育成できるよう関わっている。

特に在宅看護学領域では、さいたま市（地域包括支援センター）と連携し、「認知症サポーター養成講座」を開催し、学生の認知症サポーターを育成することで地域貢献につなげている。

○2023年度から広報委員長を担当し、入学者獲得に向けてオープンキャンパスの企画・工夫や出前講義の調整、学生スタッフとの連携を図っている。2023年度から学年の主担任を担当し、密に学生と関わり、安心して大学生活が送れるようサポートしている。特に、学修にうまく適応できず、留年してしまう学生の履修相談等を行って、進級・卒業に向けたサポートも行っている。

4. 成果（学生さんからの評価に対して、学生さんの学修成果について）

・学生からの授業評価を、できるだけ自由記述で回答してもらうようにすることで、自身の授業の長所・短所を具体的に明確化し、次年度以降の授業改善につなげるようにしている。

・授業評価アンケートでは、担当科目（在宅看護学領域）において「在宅看護の理解が深まった」「ロールプレイがイメージにつながった」「分かりやすい授業だった」などの評価を複数の学生から得ることができた。また、グループワークを積極的に取り入れたことで、「主体的な学べた」といった感想もあった。昨年度以前は、オンライン授業と対面とのハイブリッド授業であったことや回収率が低かったため、以前との単純比較はできないが、平均評点は平均および4以上であり、それなりの評価を得ていると判断している。また、試験結果についても比較は難しいが、昨年より高くなっている傾向であることから、学生の理解の向上がみられたと考えられる。今後の課題として予習・復習を充実させていきたいと考えている。

・実習では、学生一人一人への対応を丁寧に行い、スムーズに実習が行えるよう環境を整えた。心理面の配慮だけでなく、実習前に事前学修や事前試験を実施し知識を定着、技術練習を行うことで技術向上を目指していくことで、専門知識や技術を獲得するだけでなく、達成感が高いと感じている。

- ・2021年度より学年の主担任を担当している。本学初めての zoom による保護者会の企画・運営を行い、また初年次から学修支援に力を入れ、休み明け課題テストの実施や業者模試導入を積極的に行っている。評点はないものの、1年次より2年次の方が LTD を積極的に行う学生が多くなり、その効果もあつてか、再試験になる学生数が減少していると感じている。また、学生の声として、「学修習慣がついてきた」「学修が楽しくなっている」などの声が聞かれた。こういったかかわりが、クラス全体のダイナミクスにつながっていると考える。
- ・2021年度学習支援 WG・国家試験対策委員では、4学年担当も兼ねていたため、外部模試の調整・対応、学生のメンタルサポート、就職支援（履歴書・面接指導）を行い、国試合格率を100%に繋げた。
- ・2022年度にカリキュラム検討委員として活動をしていたことで、教育改善についての知識を身につけ、それを自身の教育活動に反映させることができている。

5. 目標（教育活動の中短期目標と達成時期）

- 2023年度末には、アクティブ・ラーニングの定着をしていきたい。また、その授業活動が、主体性や問題解決能力などの向上につながっていくことを明確に学生に示すことで、学修習慣を促進し、国家試験合格100%にもつながることを目指したい。
- 2024年度は、本学の DP やカリキュラム改正では、「情報処理力」「リテラシー」が述べられ、ICTの基礎的な能力育成を図る教育が必要であるため、E-learning 教材を導入し学修をすすめていきたい。

- * 表紙を含め、全体として、3～10ページ程度とします。

【添付資料】

- * TP の記載内容を客観的に示すためのエビデンスとなる資料項目を箇条書きで列挙ください。
(シラバス、開発教材、学生アンケート等、特に特徴的なものを列挙し、必要に応じて、すぐに確認できるようにしておきます。)